

<論文>日本労働総同盟の第三次分裂と労働組合全国同盟の成立

著者	村山 重忠
雑誌名	社会労働研究
巻	17
ページ	61-97
発行年	1964-02-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017611

日本労働総同盟の第三次分裂と

労働組合全国同盟の成立

村 山 重 忠

一

昭和二年の日本労働総同盟全国大会においては、大阪連合会によって「国際労働会議否認に関する件」^{注一}が提案され、二時間にもおよぶ討論が行なわれた。また翌四年の同大会においては、大阪連合会所属の大阪合同労働組合の本山茂貞や大阪金属労働組合の井上良二が開会劈頭、社民党支部長会議の合法違法、東京本所職業紹介所立退き問題、行動綱領の未決定理由、労働会館建設、解放運動犠牲者救援会と安部磯雄との関係などについて本部に対ししつような質問を繰り返えし、ことに本部提案になる産業合理化に関する決議案に対しては、本山が大阪合同労組を代表して「産業合理化絶対反対の運動を起すの件」を提案、総同盟幹部の右翼的見解に対して戦闘的労働組合主義を主張してゆずらず、特別委員会の議にかけたがそれでもまとまらず、ついに全出席議員の投票によって決するといったようなことになり、また同大会における大阪合同労組提出の議案「労働組合総連合の件」^{注二}（本山説明）は、大右翼結成主義に対抗して総同盟内にはじめて公然と労働組合の戦線統一を主張したもので、大阪連合会を中心と

する関西側はこれを支持し、関東側はこれに反対し、討論実在五時間に及ぶといった次第におよんだが、その頃の大阪連合会は総同盟内においては大いに異色の存在であったということができよう。

大阪連合会加盟組合の組合員が労働運動としていく以上のような見解は、もちろんそれ自身の組合の会合の場合においても当然あらわれている。まず、昭和三年四月八日の同連合会大会における議案「無産政党合同に関する件」(大阪合同提出)、「無産政党無条件合同に関する件」(大阪金属提出)として、また翌四年四月二日の同大会における「闘争連絡網組織提唱の件」(大阪合同)、「無産団体協同委員会設置提唱の件」(大阪金属)、「労農総連合促進に関する件」(大阪合同)として提出されているのを見てもその片鱗がうかがわれる。

しかも大阪連合会の四年度大会においては、新役員の選挙には、本部案が無条件で承認されるものとの予想に反し、出席代議員から数々の異議の申立があつて、ために再審議を行なわなければならなくなり、幹部派いわゆる「右翼派」の推す西尾末広復活の夢が破れ、少壮派いわゆる「左翼派」に加担しているとされた山内鉄吉が連合会長に選ばれ、大矢省三が主事に、鈴木悦次郎など少壮派の面々が役員の地位につき、これらのものが大阪連合会を指導するという事態を生んだ。

ところで、当時大阪における労働組合運動の主な中心は、日本労働組合評議会の解散以後は総同盟大阪連合会、労働組合総連合、官業労働総同盟などであつたが、官業労働は特殊な組合であり、総連合は比較的活動が振わず、総同盟大阪連合会がひとり全産業部門にわたって活躍しているという次第で、その大阪連合会の中心勢力は、大阪金属、大阪合同、大阪印刷出版、大阪紡織、電線工組合などであつて、組合員数計約一万、総同盟のなかでは最強の連合体であつた。しかも大阪における産業の状況と労働組合の状況とが相まって、大阪連合会をしておのづから

戦闘的ならしめつつあった。そのような結果として、総同盟大会や大阪連合会大会で前に述べたような諸議案なり要求が提出されるようになったものと見る事ができよう。

しかし大阪連合会が戦闘的になってきているといっても、その内部には「総同盟指導精神の擁護」を旗印として組合員大衆を自派に引き入れようと努めつつあったかのいわゆる幹部派と、組合員大衆の戦闘化に应えてかれらを指導しつつあったかの少壮派とがあって、陰に互に対峙していた。それが右のように四年の大会で少壮派が勝をせしめたというわけで、ここに大阪連合会の内部対立はいよいよ表面化することになるのであるが、しかも少壮派は「月曜会」と称する研究会をつくってフラク活動を行い、他方自派勢力確立のため大阪金属労組のなかに、いなむしろその枠を越えた「変則的組織」支部連合会（鉄心支部連合会）^{注三}なるものをつくり、同志的分子をひそかに糾合しつつあった。以上のような次第で、このような大阪連合会内における少壮派の動きについては、総同盟本部としては大いに頭を痛めていた。

注一、大阪連合会が「国際労働会議否認に関する件」を提案、山内鉄吉これを説明。

提案理由——「国際労働会議利用価値と利用上における実績は事実として諸君の前に現われている。今否認の重要な点を列举すれば次のごときである。

(一) 国際労働会議それ自体に本質の価値を認めず

(二) 恒久的利用価値ありと認めず

(三) しかも現実の客観的情勢においてさえ、一切の利用価値を失っている以上、我等はこれを否認すべきである」

この議題について一時間半にわたり討論があったのであるが、結局大阪連合会が撤回することとなり、本大会議題から削除することに決定された（「労働」、昭和二年一月号、一一頁）。

注二、議案「労働組合総連合の件」は、「大体において大阪連合会を中心とする関西側は原案を支持、関東側は反対にて討議

五時間余に及ぶも決せず、結局一一名の特別委員に附託し協議の結果、一切を中央委員会に一任することとし之を承認可決。
○提案理由の概要

支配階級の攻勢に対抗するため労働組合の勢力集中を計らねばならぬ。然し乍ら旧評議会系に属する労働組合は分裂主義に洗礼され統一困難なるを以て之を除外し、其他の組合は凡て一つの組織に結成するよう総同盟が提唱し各組合を招待して結成せんとする。

○反対意見の概要

一、労働組合が左右両派に整理されることは世界的状態であって、現在我国に於ける中間派団体の如きは永續性を有しない。故に今更総連合を唱へずとも反共産主義系の団体は必然的に総同盟に合流し来るであらう。

一、総連合は結局合同まで行かねば真の目的は達せられぬ。然るに合同するとなれば他の団体に総同盟自身がかく乱されるおそれがある。

一、其の他組合同盟との主義主張の相違および地方的問題に於ける確執を理由とする反対論または時期尚早論。

○賛成意見の概要

一、従来総同盟は旧評議会一派の唱ふる偽瞞的総連合問題に対しては反対の態度を採り来ったが、今や評議会は其指導精神の誤れることを曝露して再び起つ能はざるに至ったのみならず、また大衆は日和見的小細工の爲めにも動かされざるに至り、総同盟の現実主義は完全に勝利を得た。茲に総同盟が総連合の提唱をなすは最も当を得ている。

一、組合同盟員中には共産主義反対を表明せるものもあると共に、総同盟より分裂せることの失敗を感じているものもある。

一、総連合により組合内部をかく乱せらるるが如きことなきのみならず、総同盟の指導精神の下に他の団体を克服せしむる実力と自信がある」(内務省社会局「労働時報」、昭和三年一〇月号、一八頁)。

注三、大阪金属労働組合の規約によれば、「同一工場または小地域内に二つ以上の支部があるときは連合すべし」とある。左翼派のものはこの規約を無視し、大阪全市に跨って各方面に支部をつくり、さらに金属産業以外のものまでも抱擁している。

二

大阪連合会内における本山、鈴木を中心とする一派のいわゆる「左翼的」言動について、他の一派たる西尾末広、金正米吉、塚本重蔵などが心よからず思っていたことはいうまでもない。

ところで、ここに次のような問題が起った。それは、中山太陽堂・プラトン万年筆工場における解雇問題に基因する紛議の処理についてであるが、争議当事者たちは、右争議の担当者であった八谷幸太郎、前田種男のとった態度が非階級的・官僚的であったとなし、それらのものの査問を大阪金属労働組合理事会に要求してきた。

そこで理事会は、再度（四年六月二日および二四日）支部の責任者と右兩名とを招き、双方から事情を聴取して両者の歩みよりに努めた結果諒解が成ったことと信じ、改めて再び（二九日）理事会を開き解決することになった。ところが西支部連合会は「本部役員たる者は同一責任を持って前田、八谷両君を援護し他方争議当事者に対しでは善く納得の出来るまで説明すべきであるにも不拘、本部理事者中、反って団員と共鳴し、協力して両者を攻撃するが如きはわれ等の断じて賛同し能はざるのみならず、之れ明かに現実派支部なる両君を排撃せんがための策謀に出でたるものにあらずして何ぞ、われ等は断じて黙視出来ない」と組合本部の態度を非難し、さらに他方本山茂貞などのごとき、現実派の中心人物たる金正米吉排斥の「陋劣な運動」^{注一}をやっているが、これらのことを「過去三四年間における大阪金属労働組合並に大阪連合会の空気、各種役員会の模様、一般的行動の状況」などとにらみ合すときわれわれとしては「大いに決意するところあり」（脱退声明書による）というので、二八日拡大執行委員会を開いた。そして「総同盟の指導精神確守発揚」という見地からもこの際適当な革新を断行し大阪連合会や大阪

金属労働組合の内部に介在する弊風を一掃する必要があるが、しかしそのような場合には必然に「猛烈なる内部闘争が表面的に展開され遂には分裂を招致する憂あり、依って大阪連合会並に大阪金属組合に大なる波乱を生ぜしめざるためには静かに後退するより外途な」(同上)しと協議一決、西支部連合会から選出されていた大阪連合会並に大阪金属労働組合の一切の役員は直ちに総辞職すべきことを決議し、翌二九日大阪金属労組本部理事会にのぞみ、開会劈頭、役員の正式辞任を申出た。

よって、理事会は直ちに、山内、大矢、金子巽の三名を交渉委員として西支部連合会に派遣し、問題の事実調査並に留任勧告を行うことにした。

西支部連合会は七月六日拡大執行委員会注二を開き、理事会から派遣された山内、大矢などの訪問をうけいれた。その席上大矢は次のような調停案を提示した。

- 一、本山茂貞に中央委員を辞任せしめること
- 二、長田孝三、塚本重蔵以下金属労働組合島屋支部連合会幹部の辞任届は撤回すること
- 三、将来両派とも反朋党的行動をとらぬこと

右の調停案に対し、長田孝三の意見は

- 一、本山茂貞一名の中央委員辞任により到底円満に行くとは思わない
- 二、現在大阪連合会は一大危機に当面しているにもかかわらず、会長および主事は左派の抬頭を抑制せず、かえってこれに加担しようとするもようである

と、暗に山内、大矢などの態度に対し皮肉の言辭をはいている。

これに対し山内は、「少壮派の勢力は侮り難く、無理にこれを圧迫しようとするときは、ますます一派をして反幹部勢力を昂めしめ、收拾できぬ状態となるほかない。したがってわれわれは、その態度をあくまで鮮明にせず、円満な協調を望んでいる」と言外に少壮派を処分してまでも幹部派を擁護する意思のないことを表明した。故に、西尾は連合会の最高幹部たる山内がそのような考えであればいたしかたないということで、この会見はなんらの結論を見ることなくやむやのうちに終った。^{注三}

しかし、その後、幹部派なる西尾、塚本、金正などはそれぞれ各組合の幹部たちと会見して少壮派を葬るべく策動し、他方少壮派なる本山、鈴木などもやはり各組合の間をかけまわり幹部派を葬るべく暗躍した。故に中立派たる山内としては、本山を処分するのであれば喧嘩相手である金正もやはり同じように処分すべきである、という考えをいだかざるを得なかった。これに対し、長田、塚本などの意嚮は

- 一、本山茂貞、鈴木悦次郎の両名を総同盟から除名すること
 - 二、大阪連合会長山内鉄吉、同主事大矢省三はその役を辞すること
 - 三、金正米吉は関西同盟会主事および会計を辞すること
 - 四、役員を辞した大矢省三は大阪金属労働組合長に就任すること
 - 五、山内鉄吉は絶対役員に就任せぬこと
 - 六、大阪連合会長には西尾末広が就任すること
 - 七、松岡駒吉の帰朝を待って総同盟臨時大会開催を要求し、大会席上で左翼派を除名すること
- というのであるが、これが少壮派によって拒否されることは明かである。

しかしその後、西尾はこの案をたづさえて山内、大矢と会見、秘密裡に協議をつづけ、まず次のような案をつく^{注四}った。

一、会長には工場に働いている電線工組合の広岡

二、主事は金子巽、小林広吉、山口常次郎のうちから選ぶこと

三、会計は現在通り

四、オルガナイザーには現在のもののほかに井上幸夫、熊本与市を増員

五、月曜会を解散すること

六、鉄心支部連合会を整理すること

七、金正は一年間連合会に関係してもらはない、その代りに同盟会の仕事をしてもらうことにする

八、本山には一切の役員を辞任してもらい、当分謹慎静養してもらうことにする

九、調和と統一を完全にするために山内、大矢を連合会参与として、あらゆる機関に参画させ、また重大な問題については西尾、大矢、山内、金正、塚本の五名が充分に内協議をとげ、一致の態度で機関にのぞむこと

ところが、右のような案に対し既に承諾を与えていた西尾は、その翌日次のように訂正してくれといってきた。

連合会長 西尾末広

主事 小林広吉

会計 長田孝三

そこで、山内などは各支部の了解を得るため多少の猶予を求めたが、西尾は「少数幹部で決めてこれを一般にお

しつけばよいのだ」として肯んぜず、ついに西尾案に対し各支部が充分徹底した了解を得ぬままに会を終った。かくて七月一七日大阪連合会執行委員会が開かれたが、本山、鈴木およびその一派は月曜会員を入場させ、原案に反対の態度をとり、ついに「われら兩名も総同盟を脱退する故、西尾、金正両君も此際総同盟を脱退せよ」と力説して譲らず、両派は対峙のままにまた散会した。

以上のような紛糾状態の継続のなかで、大阪金属西支部連合会は、同月二〇日拡大委員会を、二二日総会を開き、次のような連合会脱退の決議を発表した。

決 議

吾等は大阪連合会が共産党的左翼戦術の心酔者を一掃し月曜会を解散せしめ、大阪金属労働組合がその規約に基き支部連合を完全に整理し以て明確に現実主義を確守実行するに至るまで、大阪連合会及び大阪金属労働組合より退き以て即時総同盟本部直属支部となることを決議す

また大阪金属栗本支部でも七月二一日支部総会を開き、やはり大阪連合会からの脱退を声明し、同朝日支部でも多数が脱退に傾いた。

他方、大阪紡績天満合同支部では態度を決定すべく七月二一日役員会を開いたが、西尾派と本山派との間に意見が対立し、採決の結果二〇対一二で西尾派が勝をしめ、この反対者一二名のうち七名の幹部については少壮派に通謀しているとの理由で除名を宣告し、二二日役員総会の決議と、それら七名の除名を合せ発表し、山内鉄吉を査問にふすることにした。

このような陰悪な事態に対して、大阪連合会は、山内、大矢兩名の名で次のような声明書を発表した。

声 明 書

光輝ある大阪連合会を守れ！

大阪連合会所属大阪金属労働組合西支部連合会は今回大阪連合会並に大阪金属労働組合より脱退したと、同時にその声明を各支部に発送している。我等は過日來大阪連合会の分裂を如何にして防止すべきかについて再三再四協議せしが、左の如き意見の相違から遂に意見の一致を見ずして今日に立ち至った。

一、今日の大阪連合会は総同盟の指導方針に反するものとして一部の人を除名すべしと主張してゆずらず（脱退派）

二、大阪連合会の数回の分裂は無産階級運動の上に一大損失なることをつくづくと体験したるを以て何とか一致協力してこの対立の空気を除去せんと努め将来をより以上の実力を持つよう努力しようとの意見のもの（脱退反対者）

以上二つの理由を以て過日の大阪連合会執行委員会開催を見たが、執行委員会に於ても意見の一致を見ず再開を決定して散会した。然るに昨日突然、前西支部連合会より脱退声明書を發表した。これは事実上大阪連合会の分裂にしてその後各支部に向って脱退を勧誘しつつあるを聞く。この時に当り各支部は大阪連合会の力を分散する斯くの如き運動に対しては、無産階級の為に公正なる批判をなし慎重な態度を以って大阪連合会を守らん事を切望する。

お互いは醜い争いを止めて支配階級の攻勢に備えましょう！

しかし大阪連合会内の紛糾はもはや到底収拾できぬ状態にたちいたった。大阪合同労働組合は、大阪金属労働組西

支部連合会の脱退声明書発表については「直接関係がある」となし、対策協議のため二二日緊急拡大本部委員会を開き、金正の除名を決議し、二四日組合の態度および西支部連合会の決議に対する反駁の声明書を、同時に金正の会計、組合長除名に関する声明書を発表、その後の各組合の動きとしては、大阪金属西島支部では二五日西支部連合会と行動をとるとの声明書を発表、大阪金属東南支部連合会では二八日拡大委員会を開き連合会死守を決議し声明書を発表、大阪金属北支部では同日投票によって西尾派支持を決定し声明書を発表、大阪紡織労組では二九日緊急本部会を招集し西尾派支持、組織宣伝部鶴五三の除名を決議するなど、各組合の動きは大きな関心事として当時の労働運動者の心をとらえた。

このような渦巻のなかで、紡織天満支部の被除名派は二六日有志懇談会を開き、次のような決議をした。

決 議

我等は西支部連合の声明書の総てを承認する不能、故に西支部連合と行動を共にせず、光輝ある総同盟大阪連合会を最後まで固守し、分裂運動に絶対反対す。

そして三一日大阪紡織労働組合脱退派支持反対の支部有志が懇談会を開いて連合会復帰を決議し、続いて新組合設立決定の声明書を発表、八月二日天満紡織合同支部から除名された七幹部および四貫島、大和田、北大阪、柏原、住吉の各紡織支部の有志が集まり関西紡織労働組合組織準備委員会を持ち、四日関西紡織労働組合創立大会を開き大阪連合会を守るとの決議をした。

他方、脱退を声明した各支部および新に態度を表明した大阪紡織労組の一部のものは、脱退派「現実派大阪連合会」を組織することを表明し、八月三日その準備会を開いた。この創立準備会への参加団体は、陶業労働組合、

大阪紡織労働組合、大阪金属労働組合所属西支部連合会（一一支部）、北支部連合会（三支部）、西島第一支部、此花支部、栗本支部、久保田支部などであるが、これらの動きに対し、大阪連合会は責任者山内鉄吉の名義で八月五日「無意義な脱退さわぎに乗ってはならぬ―労働組合のいろはを知らぬあわれな脱退幹部」と題する長文の声明書を発表している。そのなかには「大阪金属労働組合拡大本部員会決議」と題するみだしで次のように書いてある。

一、脱退支部に対する態度

イ、西支部連合会其他大阪金属労働組合を脱退したる支部員の多くは今回の問題につき充分なる其真相の報告を受けず一部幹部の一方的なる意見に基づき其態度を声明するに至りたる者多くあるを遺憾とす。

ロ、金属労働組合拡大本部員会は全大阪金属産業労働者の唯一の城塞たる我大阪金属労働組合を死守する事を決議し、而して更に今回脱退を声明せる之等友誼支部の持つ誤解の近く氷解され、再び帰り来りて我等と共に温き握手を換さる可きを確信し之れが一日も早からん事のために努力する事を誓う。

二、我等は今回の我大阪連合会及金属労働組合内部に起りたる悲しむ可き問題は一部幹部の誤れる行為とは謂い、事件発生の事実鑑み将来再びかかる問題の絶対に発生せしめざる大盤石の基礎確立のため左の事項につき幹部及組合員全体の最善の努力を期す。

A、組合内支部連合組織につき其組織は自然発生的なるも種々の弊害あるを思い、鉄心支部連合及其他の支部連合全体の地方的並に産業別整理につきても之等支部連合会の種々なる内的事情を無視する事なく一日も早く之れが整理に努める事。

B、本部理事会は毎月一回以上必ず開催する事。

C、本部会計は毎月一回理事会に於て各支部会計立会の下に必ず会計報告をなす事。

D、本部費其他（争議、政治）一切の預金は会計と組合長と別々に通帳と印鑑を保管する事。

E、個人貸出しは一切之れを禁じ特別支出については必ず理事会の承認を要す。但争議其他の組合支部の公費として組合長並に会計の必要止むを得ずと認めたる時は例外とするも次回理事会に於て事後承認を要す。

F、右Eにつき事後承認は絶対に之れを許さず。

三、本部常任（役員）理事。

A、我大阪金属労働組合各支部に対し脱退を勧誘したる前田種男、八谷幸太郎両君を大阪連合会及大阪金属労働組合本部、支部一切に寄せ付けざる事。

B、右兩名は大阪金属労働組合本部支部の一切の役員を辞任する事。

C、右兩名は大阪連合会関係につきてもまた同じ。

四、連合会内組合員有志にて成れる月曜会の発生の精神につきては諒解するも其弊害あるを認め、之れが解散を命ずる事を連合会に提議し、大阪連合会組織内の青年部或は教育部を有機的に活用せしめる事。

尚本山鈴木両君より連合会全体の為め必要あらば役員を遠慮したしとの申出であるを諒とし連合会委員会にて組合長の裁量に一任する事。

右決議す。

昭和四年七月廿九日

大阪金属労働組合拡大本部員会

そしてさらにこの声明書には、脱退派が問題を本部員会にかけ満場一致の形式をとる努力をすることなく組合員に對して脱退を策動しつつあるのは「組合運動の独裁主義者の陰謀」に外ならず、かくのごとき「統制を案する者には団体運動をする価値なし」と断じ、われわれは団結し「大阪連合会を守ろう」と結んでいる。

注一、後述の現実派大阪連合会創立大会における西尾末広の経過報告を参照。

注二、協調会大阪支所長藤沢の報告第二〇六二号「総同盟大阪連合会内紛の件」（昭和四年七月二日）による。

注三、昭和四年七月六日開かれた西支部連合会拡大執行委員会での空気からみて、大阪連合会加盟組合の色分けは次のようなことになると思われた。

大阪金属労働組合		組合員		少壮派		幹部派		去就不明	
鉄心支部連合会	約七〇〇			四八〇		二二〇		〇	
島屋支部連	約一〇〇〇			二〇〇		九〇〇		〇	
西支部連	九〇〇			〇		九〇〇		〇	
瑠瑠支部連	三四〇			三四〇		〇		〇	
東南支部連	三〇〇			一五〇		一五〇		〇	
直屬支部									
北恩加島支部	五〇〇			〇		五〇〇		〇	
栗本支部	五〇〇			〇		五〇〇		〇	
泉尾支部	一二〇			〇		八〇〇		〇	
久保田支部	八〇〇			〇		〇		〇	
千舟松井支部	五〇〇			〇		〇		〇	
大阪合同労働組合	一、一〇〇			六〇〇		四〇〇		〇	
電線工組合	一、〇〇〇			〇		〇		〇	
大阪印刷出版労働組合	二〇〇			一〇〇		〇		〇	

内 訳

大阪紡織労働組合
大阪運輸労働組合
大阪陶業労働組合

計

一、五〇〇	二〇〇	一、三〇〇	七〇〇
七〇〇	〇〇	〇〇	五〇〇
五〇〇	〇〇	〇〇	三九〇
九、二五〇	二、〇七〇	六、八九〇	

(備考) 前掲注一の協調会大阪支所長報告による。

注四、「日本社会運動通信」第六四号、九頁。

三

昭和四年八月一〇日まず「総同盟現実派大阪金属労働組合」の発会式が、続いて翌一日「総同盟現実派大阪連合会」の創立大会が開かれた。そして連合会長には西尾末広、主事には小林広吉、会計には長田孝三、政治部長には塚本重蔵、教育部長には金正米吉、組織宣伝部長には前田種男などが選ばれ、新連合会は現在の「左翼派」のそれと区別するため「現実派大阪連合会」^注と命名することにした。

この創立大会で西尾が行った経過報告を聞くことにしよう。

「本問題の発生原因は主義主張上の争にして、金正米吉君は自由なる立場より問題を解決する為合同労働組合長を辞任したる処、本山一派は金正君の留守中に組合長も止むるなれば会計を解任すべしとて解任した。

又一方にはプラトン争議に関して金属の前田、八谷君等が御行幸等の時期なるを以て争議の解決を早めんとしたるに對し本山君が右両君は資本家に買収されたかの如き口吻を漏らすに至り、然も之に對し、最高幹部の地位にある山内鉄吉、大矢省三両君は、何等の措置もとらなかった。これは要するに共産党的技術の現われで、中傷に依り幹部を排撃するものである。

又左翼派は金正君が資本家から金を収受した云々という逆宣伝を為しつつあるので、金正君は本山君に対し多数組合員の面前で果して何人より金銭を貰ったかと尋ねたるに、本山君は一言も発し得ず、遂に自分の奉ずる共產主義的戦術を以て現実派の勢力を失墜せしめ、之にとって代らんとする魂胆を曝露したり。

其後解決案を作成して七月一七日執行委員会を開いたが、意外にも其会場には月曜会の闘士多数が詰めかけていたので傍聴禁止案を出したが、山内君は左翼青年同志に迎合し自己の意思を発表為し得なかった。

其席上、鈴木悦次郎君が、共産党系の主謀と看做さるる本山君と自分は脱退するから西尾、金正両君も共に脱退せよと実行不能なる不真面目なる提案をなせり。

斯くの如くにして遂に此の執行委員会は絶望の裡に終った。此を一貫してみると山内君には協力解決の誠意がないことがはっきりと認識されたのである。

事ここに進展して尚且大矢、山内両君が左翼のものを断然たる処分に出ない上は総同盟の指導精神たる現実主義を遵奉する我々には「泣いて馬糞を斬る」の挙に出でねばならぬ。此処に於て同じ意志を有する現実主義の人々の輿論により新しき現実派連合会の創立準備委員会を経て本日の大会となったのである。」

このように西尾は、本山、鈴木などいわゆる左翼指導者の共産党的左翼戦術に対する総同盟指導精神の擁護のために大阪連合会を脱退するというのである。かくて、二つの大阪連合会が存在することとなるが、その宣言はいう。

総同盟現実派大阪連合会創立大会宣言

日本労働総同盟はその十三年度大会に於て現実主義政策を以て指導精神とすべきを宣言した。従来採用し来った直線的革命主義——即ち一切の民主主義否認——からこの劃期的方向転換を敢行したのは宣言の示すが如く

「吾等明徹なる批判力と階級意識に目覺めたる今日の戦闘的労働組合員は支配階級の革命的精神を鈍らす爲めに与えんとする改良的政策を利用するとも、断じて墮落せざる事を」非常なる意氣と決死的闘争と、幾多の試練から信じ得るに至ったからである。然るに空想的理論に陶醉し、現実政策の重要性を会得せず、且又現実政策の実績を挙ぐるに必要な困難に打勝つ意氣と忍従を持たず、依然旧感を脱し得ざりし信念なき少数者は遂に自ら異をたて統制を紊すに到り所謂、総同盟分裂の不祥事、即ち左翼の清算が前後二回に亘って決行された。

この決行は現実政策の必要が日本の労働運動の全般的發達の上に痛感される状態の下に於て万止むを得ざるの処置であつた、当時之等異端者発祥の地であつた東京にありてはその清算が完全に徹底的に敢行せられ、結果酬いられて今や関東は一糸乱れざる統制の下に現実政策を充分に把握し偉大なる、成果を収めその意氣や盛なるものがある。

翻つて吾大阪に於ては、当時関東とその事情を異にするものありし爲め、異端者の徹底的清算をなすに至らず今日に至つたが、その当時鳴りを窺めいたりし少数の異端者は、時と共にしゆん動を開始し、今や共産党的左翼戦術を弄して光輝ある総同盟の指導方針に猜疑心を働かし殊更に異をたてて、之を変革せんと企てるに至つた。

斯くて彼等信念なき空想主義者は無産階級の無条件即時合同、労農総連合の如きを叫び労働組合の、いろはのみを知る彼等觀念論者は全国連絡闘争綱を主張し、或は秘密結社を組織して陰謀の本拠となし総同盟精神の忠実なる把握者を中傷さん侮し、その排撃を謀る等、彼等の斯かる言動を默視するに於ては吾等の愛する、大阪連合会を遂には破滅の運命に導くであろう事は火を見るよりも明らかである。

然るに大阪連合会を統制すべき任にある現幹部は、この明々白々たる不逞の輩に対して何等の処置に出でざるのみならず、或る者は寧ろ之に迎合し或る者は逡巡為す処を知らず、却って之等反逆者を擁護するが如き態度にさえ出でつつある。

吾等は、大正十三年「独り日本労働総同盟の運動方針に於て特に重要な意義を帯ぶるものである事を確信」し日本労働総同盟全国大会の名に於て発した大宣言即ち現実主義の指導方針に未だ何等の変更を加えなければならぬ客觀的状況の変化を認めないのみならず、現実政策採用後の総同盟は隆々としてその声望を高めつつあるに反し、一方空想主義的觀念的理論に魅せられて、総同盟を放れた左翼一派―評議会、組合同盟―の末路は、轉た慘鼻の極みである。

此の否定すべからざる事實に直面し來った吾等は、愈々信念を堅くして総同盟の指導精神たる現実主義をより以上に徹底せしむべく努力する運動方針こそが、総同盟精神を確守する正道であり、同時に無産階級解放運動の跳躍的發展を齎すものである事を確信する。

かかるが故に、吾等は彼等共産党的左翼戰術論者及それを意識的又は無意識的に擁護しつつあるが如き、觀ある一派に蝕ばれつつある大阪連合会を脱し、同志相血盟して新に大阪連合会を建設し眞に光輝ある総同盟の指導精神を死守せんことを決意し、實現するに至った。

吾が現実派大阪連合会創立大会はその名に於て茲に以上を宣言するものである。

昭和四年八月一日

日本労働総同盟現実派大阪連合会本部

以上のように西尾を中心とする脱退派は「現実派大阪連合会」を結成し本部直屬を声明したので、いわゆる「現」

大阪連合会は八月一四日委員会を開き、鈴木、本山両役員の辞任申出を承認し、両名並に脱退者が持っていた連合会役員の補充を行い、脱退者の取った行動については、組合の憲法を無視し、その統制を乱し、主事代理の重職を悪用して切崩しに狂奔するものであり、長年組合運動を行うものの断じて取らざる行動であるとなし、彼らの処置を中央委員会に提言することに態度をきめた。

このようにして、大阪連合会は完全に分裂した。この間、大阪連合会および現実派連合会の間に介在して、これを調停しようと努力した組合に、大阪電線工組合および大阪金属島屋支部連合会の二組合があるが、その努力も効果を収め得ずして終わった。その後、両組合は、ともに大阪連合会（残留）を支持し南恩加島支部も大阪連合会に残留して脱退派には組しないことになり、ここにおいて両派間の抗争は一先ず小康を得ることとなった。

注、協調会大阪支所長藤沢の報告、第二〇七二号「現実派大阪連合会発会式挙行の件」（昭和四年八月一六日）。

四

大阪連合会内における両派の対立・抗争は、さきに述べたごとく一応落つきを見せたのであるが、総同盟本部が下す決断に対しては、両派ともに重大な関心をもち期待をかけていた。

その緊急中央委員会が八月二三日総同盟本部において開かれた。^{注一}出席者は、鈴木会長、松岡主事、斎藤、福岡、原、仲浜（土井代理）、小岩井、赤松（以上関東）、西尾、小林、金、山内、大矢、山口（以上関西）、三木（直属、製綱労働）の一五名。

まず議事に入るに先だち松岡主事から、本山茂貞、鈴木悦次郎の中央委員辞任にともない、大阪連合会が大矢、

山口の両名を補充として推薦したとの報告があり本論に入ったが、西尾などの現実派は本山などの除名を迫り、本山派は西尾などの除名を提議し、山内などは「現」大阪連合会の決議として左翼除名反対、分裂反対を唱え、委員の意見全く一致せず、数回にわたる休憩懇談を重ね、三日後すなわち二五日夜になってようやく次のような処分案が決定されるにいたった。

一、左翼に対する処分

① 鈴木悦次郎、本山茂貞はこれを除名す

② その他の左翼分子に対する処分についてはその範囲並に処分の軽重を決定する権限を左記特別委員に委任す
(委員長) 松岡駒吉、(委員) 金 光平、三木次郎、原 虎一、斎藤健一

二、大阪連合会内紛の融和と改組

① 連合会の改組は特別委員と新旧連合会同志との協力に依って決定すべし

② 右決定と同時に現実派連合会は即時解散して復帰すべし

③ 月曜会は即時解散し、鉄心支部連合会は直ちに改組すべし

④ 大矢省三、山内鉄吉両君は左右両翼の対立に就て重大なる責任あるものと認む(以上四項賛成一一名、棄権三名、山内、大矢、山口)

⑤ 新連合会の組織は当時已むを得ざりし事情ありし事を諒とするも事前に中央委員会の開催を要求せざりし事は統制上甚だ遺憾とし、堅く今後を戒告す

⑥ 西尾末広より新連合会組織に関して統制上の問題を惹起した事を遺憾とし、辞任の申出ありしも之れを認め

ず（以上二項賛成九名、棄権五名Ⅱ西尾、小林、山口、大矢、山内）

決 議

既に大阪連合会委員会において決定せられたる連合会大会の開催は今回の内紛問題を円満に解決し、連合会融合の実を挙ぐる必要あるに鑑み、之を延期せられたし（万場一致可決）
そして、さらに八月二五日付で次のような声明書が出された。

声 明 書

今回大阪連合会に惹起したる内紛問題は従来連合会内に存在する左翼一派のフラクション運動者とこれに抗争するものとの対立状態にその根源ありと認めなければならぬ。我が中央委員会は伝統的方針に基づき総同盟指導精神に反する一切の左翼分派運動に対しては断乎たる処置を執行し、以って光輝ある総同盟の揺ぎなき統制を確保する義務ありと信ずる。

依って我等は茲に左翼的分派運動の中心人物たる本山茂貞、鈴木悦次郎の二君を断然たる除名処分に附する事に決定した。

我等が此の処置を取りたるは現下の大阪連合会の不健全なる対立状態を打破し、左翼的分派運動を排撃し、依って以って飽く迄総同盟指導精神の下に大阪連合会を渾然たる統一陣営に組織化し、而して其の健実なる運動の基礎を築かんとする目的に出たるものである。我等はこの目的の完全なる貫徹の為めには今後と雖も断乎たる処置を辞せざる決意を有する。

翻へって今回の内紛を見るに、本山、鈴木の二君を中心とする、左翼的分派運動にその禍根を見出すと雖も、

現下の憂う可き内紛問題の発生並に其の悪化については左翼的分派運動に対する中間派的態度を持したる幹部等にも重大な責任ありと認めなければならぬ。

我等は確固不動の総同盟精神を把握して進むためには、斯くの如き中間派的態度を放棄することが絶対に必要なりと断定する。

中央委員会は現実派連合会の諸君が左翼清算のため大阪連合会を脱退したるは事情止むを得なかったと認めるが統制上甚だ遺憾とし今後を堅く戒告するものである。

我等は今回の問題の根本的解決を図り、左翼的分派運動者を排撃する為めに、茲に特別委員会を任命し左翼分子処分の範圍、その輕重を決定するの権限を委任すると同時に特別委員会をして、中央委員会の意志を充分に徹底せしめ連合会の融和、並に改組に努力せしめる。

我が大阪連合会の同志諸君は中央委員会の意の存する所を能く諒解せられ、光輝ある大阪連合会の歴史の為に和衷協同し、一糸乱れざる結束を以って一路総同盟の発展のために健闘せられん事を熱望する。

昭和四年八月二十五日（賛成十一名、棄権三名）山内、大矢、山口）

日本労働総同盟中央委員会

会長 鈴木文治

主事 松岡駒吉

総同盟中央委員会の本問題に対する以上のような決定について、「現」大阪連合会派はこれを不公平な決定であるとし、二六日緊急拡大委員会を開き、次のような具体的な態度を決定した。^{注二}

一、中央委員会の決定には承服せず。問題が重大であるので、来る九月一日天王寺公会堂において開催される臨時大会にて態度を決定すること

二、本部特派の特別委員五名に対しては、各組合より二名の応接委員（計一〇名）をもって当たること

三、応接委員は連合会の意見を代表して会見すること

四、本部特派の五名は前記応接委員以外の者、または支部では単独で会見せぬこと

以上の決定に基づき、同連合会所属の各組合は、それぞれ次のように態度をきめた。すなわち

一、大阪金属労働組合は八月二九日夜代議員会を開き態度を決定

二、大阪合同労働組合も同日代議員会を開き連合会死守に態度を決定

三、大阪印刷出版労働組合も三〇日夜連合会支持に態度決定（九月一日その一部が脱退を声明）

四、関西紡織労働組合も同日連合会委員会の決定通り態度を決定

これに対し、「現実派」大阪連合会は、二七日松岡、斉藤陪席のもとに拡大執行委員会を開き、西尾の中央委員
会報告があつて後、中央委員会の決定事項を万場一致で承認した。

注一、『労働』昭和四年九月号、八頁。

注二、『日本社会運動通信』第六七号（昭和四年九月九日）、四八頁。

五

ところで、「現」連合会派は八月二三日に総同盟本部で開かれた緊急中央委員会の決議を無視し、九月一日その

総決算ともいふべき臨時大会を開いた。^{注一} 山内会長の真相報告Ⅱ思想上の左右の対立、幹部の独裁主義と民主主義の対立、プラトン争議を発端とする西支部連脱退の経緯、月曜会の解散問題、鉄心支部連合会の改組問題、本山、鈴木両名の除名問題などⅡがあり、これらの問題に対して幹部および連合会委員会がとった態度を万場一致で承認、次で総同盟中央委員会での三日間にわたる協議について山内、大矢から報告があり、万場一致で三中央委員の行った行動を承認。続いて本連合会の態度を決定すべく万場にはかり、「本大会は中央委員の決定には承服せず」と可決、次のとき決議を万場一致で決定した。

決 議

一、本大会は大正十四年度臨時大会の宣言に明示せる階級的現実主義を信奉し今日迄関西に於ける労働階級の先頭に立ち、資本の攻勢に対し、勇敢に現実闘争をなし来れる吾が光輝ある大阪連合会を絶対に死守す。

二、本大会は去る二十五日の中央委員会の決定は一方的なる意見に基くものにして、これ団体運動の生命とも云ふべき統制と規律を無視せる朋党的集團の現れにして真に和衷協同の精神を没却せるを認め、即時中央委員会の再考及び臨時大会の開催を要求す。

三、本大会は組合内部行政に於ける少数幹部の独裁的専制主義と分裂除名主義を排撃し、組合民主主義中央集権制を確立し過去十有八年の苦闘の歴史を持つ総同盟の綱領を尊奉し勇敢に階級戦に参加することを期す。

役員には会長大矢省三、主事山内鉄吉、会計中村弁作などが選出された。

以上のように、「現」大阪連合会は大会を決行して中央委員会にたてつく態度を示すこととなったが、松岡駒吉は特別委員長としてこの問題につき次のような声明書を発表した。

声 明 書

中央委員会は大阪連合会の所謂内紛問題が、我労働総同盟の現実政策を根本的に変更せしめんとする左翼分子と、これに反対して飽く迄総同盟の伝統を守らんとする努力との対立に端を発するものと認め、之が解決を我等特別委員に命じた。

我等は此の中央委員会の決定に従い去る廿七日下阪以来今日に至る迄、最善の努力を尽くし来った。我等の問題解決に対する態度は云う迄もなく左翼分子の徹底的排除と同時に本問題に関連して発生せる理由なき感情上の隔失を、各組合各支部との隔意なき懇談に依り成るべく円満なる融和を期せんとするに在った。然るに

一、旧連合会幹部は中央委員会の決定と隔意を無視し、左翼分子と認めらるる者を面接委員たらしめ特別委員と各組合又は支部との懇談を妨害し、

二、又面接委員は特別委員の会見を拒絶したるのみならず廿九日正午再三暴力的態度に出でる等誠意あるものと認められない。

三、旧連合会幹部は中央委員会の決定に服従せずして、その統制を紊るのみならず、徒らに個人的中傷を事とし、
四、中央委員会満場一致に依って決定せる勧告を無視して連合会大会を開催し明らかに中央委員会に対して敵対行動に出で、

五、大矢、山内、山口の三中央委員は中央委員会の申合せを無視して特別委員と何等の協定を為さざるのみならず、反って中央委員会の決定を故意に曲解せる報告を行い左翼分子に擁立せられて中央委員会と抗争せんとする態度を示している。斯くの如く旧連合会の少数幹部はその専断に依って、我等と組合員諸君との面接懇談を

さえぎり、中央委員会の意志の徹底を妨害し徒らに分裂に導き組合員を誤り、我等旬日の努力も水泡に帰したるはすこぶる遺憾とする処である。

故に我等特別委員一同は再び中央委員会に右の状況を報告し、その重大なる決意と断固たる処分を促さんと欲するものである。

日本民衆新聞は総同盟本部がこの紛糾問題について「俗論に耳を藉さず一挙左翼排除に進め^{注二}！」と、総同盟が断乎たる態度に出ることを要望し、そしてこのたび総同盟がとった措置について、「このことたるけだし総同盟左翼分子の清算であり、労働総同盟現実政策の進行途上における一整理としてわれらはむしろ、総同盟中央委員会の英断^{注三}に対し敬意を表する」と、弁じたてている。

注一、『日本社会運動通信』第六七号（昭和四年九月九日）五〇頁。

注二、『日本民衆新聞』第二三三号（昭和四年九月一日）二頁。

注三、右同 第二四号（昭和四年九月二〇日）一頁。

六

九月一日「現」大阪連合会の臨時大会が開かれたことについては前述したが、この大会における決定にもとづき、右連合会派は九月九日開かれる総同盟（第四回）中央委員会にのぞむ具体的な態度および爾後の運動方針を協議決定すべく、同月五日中央委員会を開き、まず中央委員会に臨む態度として次のようなことを申合せた。^{注一}

一、中央委員会に対する再考の内容について。一方的な決定であるので、この際円満に解決できるならば鈴木

悦、本山、西尾、金正の自決案を出すこと。これ以上に階級性を没却して妥協譲歩する必要なし。

二、三中央委員およびその他の個人除名には反対し、理由を充分きき全国大会の開催の要求をなすこと。その他は三中央委員の適宜の処置に委すこと。

今後の運動方針としては、緊急に対策委員として各組合一名、大阪金属三名を選出して一切の運動方針を具体的に協議遂行すること。対策委員会は、(一)情勢のニュースを出すこと、(二)真相を徹底さすため工場、支部単位の茶話会を開くこと、(三)演説会を中央公会堂で中央委員会決定と同時に開催すること、(四)当分大阪連合会内だけにその運動を止めること、(五)適宜の処置はこれを認めること、以上を決定し、対策委員として大阪金属労組は山口常次郎、井上良二、西野の三名、他組合は至急選出すること、その他二三の内部行政について協議した。

かくて、九月九日総同盟本部において、両派にとつては重大な関心事である第四回中央委員会が開かれた。^{注二}同日の出席者は、鈴木会長、松岡主事、斉藤、土井、小岩井、三木、赤松、福岡、原、西尾、小林、山内、大矢、山口。

さて、官業労働総同盟主事川村保太郎および日本海員組合組織部長赤崎寅蔵は、かねてから尼崎連合会の懇請によつて両大阪連合会関係者間の意見の調整方を依頼されていたので、両名は八日上京両派の当事者と会見意見の接近をはかるべく斡旋に努めた。そこで、中央委員会は、まず、尼崎連合会が希望するような双方の意見接近にいまなお可能性ありやいなやについて、両当事者の退席をもとめ協議したが、「事の硬化ここに至っては、すでにその可能性なし」と万場の意見が一致したので、鈴木会長は尼崎連合会代表および赤崎、川村を招じその旨をつたえ、直ちに再開、両派当事者の着席をもとめ、松岡から特別委員会の報告があり、万場一致これを承認、ついで協議に入ろうとしたところ、山内は突如次のような大阪連合会決議を発表した。

大阪連合会決議

八八

我等は八月二三日の中央委員会の決定は一方的な意見に基くものにして、これ団体運動の生命とも謂うべき統制規律を無視せる朋党集団の現れにして、真の和衷協同の大精神を没却せるを確信し、大阪連合会大会を通じ、中央委員会の再考及び臨時大会の開催を要求す。

採決の結果、反対一〇名（松岡、斎藤、三木、原、土井、福岡、赤松、小岩井、西尾、小林）。賛成三名（山内、大矢、山口）。

次で松岡は次のような決議案を提出、採決の結果、賛成一〇名、反対三名（氏名は前の場合と同一）。

決議

日本労働総同盟中央委員会は総同盟規約第二十九条により左記の個人並に組合を除名す。

理由

大阪連合会の内紛問題は、先の中央委員会に於て左翼分子の計画的策動に基くものなりと認め、五名の特別委員を任命して左翼分子の徹底的排除並に新旧連合会の融和改組を委任したのである。然るに特別委員の熱心なる努力にも拘わらず、

一、左翼分子と認めらるる桑島南海士、中村弁作、熊本与市、村上薫、岡五郎、福住豊隆、井上良二、井上幸夫、田中良一、津脇喜代男、鶴五三、大森種一、西野芳雄、塩浜芝彩の諸君は何等反省の態度なきのみならず、反って総同盟幹部の根拠なき個人中傷に狂奔し、或は特別委員に対して暴力行為に出づる等、中央委員会の決議に反抗し、

二、山内鉄吉、大矢省三、山口常次郎の三君は、自ら参与せる中央委員会の決定を蹂躪し、特別委員と誠意ある協力をなさざるのみか、反って左翼分子を援けて総同盟の統制を攪乱し

三、旧大阪金属労働組合、旧大阪合同労働組合、関西紡織労働組合の三組合は、左翼分子の指導に盲従して総同盟の統制に服せず、反抗の態度を示して居る。然も猶中央委員会は問題の円満解決の為に百方手段を尽したのであるが、彼等は更に反省せず、茲に於て、日本労働総同盟の指導精神を確守し、其光輝ある統制を厳にせんが為めに、規約第二十九条に従い、以上列記の個人及び組合を断然除名処分に附するの止むなきに至ったのである。

我等は、斯くの如き事情に対し、もとより甚だ痛心に堪えざるところである。然し乍ら総同盟の一貫して抱持せる現実主義政策の確立は、我国労働組合運動の健全なる発達の為に絶対に必要である。ここに我等は重大なる責任を痛感して、断乎たる処断をなしたる次第である。

希くば全国の組合員諸君が、よく中央委員会の意のある処を明察し、総同盟の現実政策の徹底を期し、以て日本労働組合運動の発達の為に、勇往邁進せられんことを。

次いで(一)現実派大阪連合会は直ちに解散するとともに改組すること、(二)その改組にあたっては、改組準備委員会を組織し、大阪における現勢力中から八名の委員を任命し、且つ中央委員会から三名を同委員に任命参加せしめ、相協力その万全を期すること、なお改組準備委員としては、松岡駒吉、原虎一、土井直作(以上中央委員)、西尾末広、小林広吉、塚本重蔵(金属)、押谷半七(金属)、金正米吉(合同)、元阪順次(陶業)、江見純一(印刷)、山口正義(紡織)を選定、以上を万場一致可決。続いて西尾から「今回我が総同盟が、大阪連合会を攪乱せる左翼的分

子と之に盲従或いは追隨せる者の処断を了せる今日に於て、自己が多年、大阪連合会の先輩たるに拘らず、夙に左翼的勢力を芟除し、この重大なる結果を未然に処理する方策に出で得ざりしことは誠に自責に堪えず」との理由によって中央委員辞任の申出があり、これに対し委員会は次のような決定を行なった。

大阪連合会内紛に関する西尾末広の責任については、さきの緊急中央委員会がこれ进行处理したので、今あらためて当面の内紛問題責任に触れる必要はないが、その申出については、その意の存するところを察して、今後大阪連合会改組並に改組後の発展に極力尽粹することを条件として、中央委員辞任の申出を受理する。

なお、小林広吉の中央委員の申出は受理する。

他方、被除名派の大阪連合会は九月一二日大会に代る拡大連合委員会を開き、報告と今後の運動方針Ⅱ中央委員会の決定に承服するやいなやについての決定について種々論議したが、具体的方針は追って連合会、委員会で決定発表することとなった。

注一、『日本社会運動通信』第六八号（昭和四年九月一六日）三〇頁。

注二、『労働』昭和四年一〇月号、三頁、七頁。

七

九月一三日被除名派は常任会議を開き、今後の運動方針の具体案を決定すべく論議を重ね、次のような決定を行^{注一}なった。

一、大阪連合会を中心に全国的な組織の結成を準備すること。名称は「労働組合全国同盟結成準備会」とするこ

と、

当面のスローガンとして

(一)、少数幹部の独裁、専制主義絶対反対

(二)、民主的、中央集権制の確立

(三)、労働組合戦線の全国的統一

(四)、戦闘的現実政策の徹底

(五)、階級的労働組合の旗の下に

二、僚友地方連合会、組合をもって「分裂反対同盟」を結成さすこと

(一)これが理解と具体的運動に入るため僚友連合会に相当の人を特派すること

(二)その闘争スローガンは、(イ)除名分裂主義絶対反対、(ロ)少数幹部の独裁専制主義絶対反対、(ハ)民主的

中央集権制の確立、(ニ)階級的現実主義を守れ、(ホ)中央委員会の決定反対、(ヘ)朋党的中央委員の辞任

要求、(ト)全国大会の即時開催要求

これらの具体案は各組合で相談し、来る一六日の連合会委員会で最後の決定をすることにした。

他方、大阪金属労働組合は九月一四日拡大本部員会を開き、中央委員会の報告、各支部の情勢報告などあつて議

事に入り、(一)全般的に意見を反映さすため各支部から一名以上の理事を出すこと、(二)本部各部長の補充として財政部長に寺西藤三郎、出版部長に井上良二、政治部長に山内鉄吉を決定、(三)連合会常任会議案にもとづき、総同盟から別派に「労働組合全国同盟」を結成して進むこと、などを連合会委員会に申出ることを決定。

続いて一六日開かれた大阪連合会委員会では、^{注三}今後の運動方針についてさきに常任会議で決定した具体案を骨子として協議し、概ね原案を承認、名称を「労働組合全国同盟」とすること、新方針を決定すること、同年一月までに創立大会を開催することなどをきめた。

ちなみに、日本労働総同盟は、「左翼清算後の大阪における総同盟勢力」として、次のように報じている。

組合名	除名前の組合数	除名した左翼組合員数	残留した組合員数
大阪連合会	九、六九四		
大阪金属	五、六五四	二五〇〇	二、六五四
大阪合同	一、〇〇〇	七〇〇	三〇〇
大阪出版	三三〇	五〇	二七〇
大阪紡織	一、四〇〇	一〇〇	一、三〇〇
大阪運輸	二〇	〇	二〇
大阪陶業	二八〇	〇	二八〇
電線工組合	一、〇二〇	〇	一、〇二〇
関西紡織	一〇〇	一〇〇	〇
大阪製陶	五〇〇	〇	五〇〇
計	九、六九四	三、三五〇	六、三四四

(注、大阪紡一、三〇〇は関西紡一〇〇を引いた数)

注一、『日本社会運動通信』第七〇号（昭和四年九月三〇日）四頁。

注二、右同 四―五頁。

注三、右同 五頁。

八

以上のように、大阪連合会内紛問題は行くところまで奔流し、ついに総同盟は第三次の分裂をするが、この問題はさらに社会民衆党大阪府支部連合会の内紛問題へと発展し、最後に社会民衆党の分裂という事態をうみ出すこととなる。

すなわち総同盟は、その後、被除名派がその支持政党である社民党本部中央委員の鈴木、松岡、西尾に対し無根の事実を流布して個人の名誉を傷つけるばかりでなく、第二インターナショナルを否定する態度は社民党の指導精神を否定することに外ならず、したがって、このことは党を支持して居りながら党の幹部を傷つけ、やがては党を攪乱し自己の野望を達せんとするものであるとし、その「正体を曝露して一挙に彼らを清算せよ」^{注一}といきまいているが、社民党は一〇月一七日の執行委員会で島中、為藤、赤崎、川村、松永の五名を調査委員に選び、大阪における両派につきそれぞれ意見を聞き、それにもとづいてさらに片山、赤松、島中などで次のような案をまとめた。^{注二}

一、労働総同盟分裂の禍因となった少数個人の処分

二、党内における抗争反目は党の統制と平和を攪乱するから両派とも責任重大なるものなりと認め厳に戒告すること

三、個人的攻撃は事由の如何に拘らず党の信用を失墜せしむるものなるにつき遺憾の意を釈明せしめ、嚴に将来を戒めること

しかし中立派だけは賛成したが兩派ともこれを容認せず、結局なんらの効果がなかった。そこで党は一月一日中央委員会を招集し、「大阪連合会内紛問題に対する社民党の態度決定」を議題に討論を重ね、その前日の執行委員会をつくった次のような原案を、^{注三}賛成二四名、反対四で可決した。

一、中央執行委員会は左記八名に対し党則第三十七条の趣旨に則り脱退を勧告す

本山茂貞、鈴木悦次郎、桑島南海士、熊本与市、井上良二、田中良一、津脇喜代男、福住豊隆

右回答は一週間以内にすべし、回答なき場合は中央執行委員会に一任すべし

二、全国同盟の党役員になしたる中傷は党の社会的信用を失墜せしめたるものなるにつき遺憾の意を釈明せしめ、嚴に将来を戒告す、この釈明方法は中央執行委員会に一任す

そして社民党本部は次のような陳謝文を起草し、これを全国同盟機関紙および大阪新聞に掲載するよう要求している。

陳謝文

さきに我等が総同盟幹部にして党役員たるものに対し個人的中傷を行ないたるは、当時組合対立の抗争渦中にありし故とはいへ党の社会的信用を傷くこと大なるものあるを感じ茲に党本部に対し陳謝の意を表し併せて今後嚴に斯くの如き言動を為さざることを声明す

これに対し、全国同盟大阪連合会は社民党中央執行委員会宛大矢、山内連名で次のように回答し、さらに「同者

は名を愛党的犠牲に供して脱党をさせる」との声明書を出している。^{注四}

回 答

中央委員会の決定は理論的にも感情的にも更に社会民衆党の社会的信用の上からも、絶対に承服し難し寧ろ之等社会民衆党の社会的信用を傷けたる者に対し、党の名誉と信望の上から断乎たる処置に出ずるべしとの強硬なる意見等も有之候へども

安部党首の懇切なる御意見、書記長並に多数中央執行委員諸賢の熱意ある御努力を詳細に報じたる所、大社会民衆党結成の爲め此の際、愛党の精神を以つて更に党首安部磯雄先生、並に執行委員会を信頼し、これを承服する事に、満場一致を以つて決定致し候間、然るべく御配慮御処理下され度く、尚今回の問題を逆用して組合宣伝に利せんとするが如き計画が行なわれんとする場合に候へば、全国同盟の組合員をして益々社会民衆党愛に精進せしむべく、決定条項第二項に対する取扱等について充分なる御配慮煩したく御依頼に及候

以上

右御回答申上候

ところが、党本部は右の回答について「声明書の内容、陳謝の技術方法が余りに酷に失する」から再考を煩した
いととの申出があったからと理由づけし、陳謝の方法を若干緩和し次のように改めることにした。^{注五}

- 一、陳謝文および声明書の内容は変更せず
- 一、全国同盟の機関紙に陳謝文を載せること
- 一、声明書は八日以後には撒布せず
- 一、一般新聞広告はせず

一、此の際特に党宣伝演説会を大会直後大阪で全体の協力で催すこと

そして、この陳謝方法の諾否如何の回答の提示を同月七日以降三日間にわたって開催された社民党第四回大会の第一日朝までにしよう申し入れた。しかし全国同盟からはなんらの意志表示がなかったので、この問題は大会に持ち越され、大会では山梨県連の田中正則の緊急動議で「大阪問題特別委員会」が成立、二二名の委員によって審議が行なわれたが、二〇対二、すなわち全国同盟派の二委員の外はすべて党中央部の決定を支持することとなり、この委員会は次のように議場に報告した。^{注六}

報 告

本部報告中大阪問題に関する部分を承認すべきや否やの審議を委託されたる委員会は、中央委員会決定の第一項に就いては既に解決済みなるに就き問題とせず、第二項の釈明方法に関する中央執行委員会を承認するか否かに就いて討議を行ない、西尾末広君等に対し階級的裏切行為と指摘されたる事実^{注六}に就き慎重審議を遂げたる結果、委員会は二〇票対二票を以て断じて階級的裏切行為にあらずと認定し大会は質問討論を省略して本部報告を承認すべきことを二〇票対二票を以て可決せり、よって委員会は大会に対し大阪問題に関する委員会報告を質問討論を用いずして直ちに承認すべきことを要求することに満場一致決定せり

昭和四年一月九日

大阪府支部連合会内紛問題に関する特別委員会

右報告が終るや議場はたちまち混乱状態におちいった。そして全国同盟派の代議員たちが退場、大会第三日には田満清臣が袂別の辞を述べ、翌一〇日全国同盟派は脱党声明書を発表、かくてついに社民党は分裂した。脱党した

全国同盟派のものはただちに新党の組織準備に着手し、同月一三日新党大阪府支部連合会結党大会を挙行、新党組織の運動を進め、翌五年一月一五日東京本郷キリスト教青年会館において全国民衆党結党大会を挙行、中間派政党としての一步を踏み出す。

以上のように、総同盟大阪連合会内紛問題は、単に総同盟の分裂というだけにとどまらず、支持政党たる社会民衆党の分裂というところまで発展したのであるが、この二つの事実を通じ誰が分裂主義者であるかということがはっきりわかつて思う。

注一、日本民衆新聞、第二七号、昭和四年一月一日。

注二、右同 第二八号、同年一月一五日。

注三、右同。

注四、全国労働者新聞、第三号、昭和四年十二月一日。

注五、「労働」、昭和五年一月号、六頁。

注六、右同。